

講孟劄記

一

山本大
和 郎
201

松陰吉田先生著

講孟劄記

長門

明治己巳仲夏

松下邨塾開雕

序

道則高矣美矣約也近也人徒見其高且美以
為不可及而不知其約且近甚可親也富貴貧
賤安樂艱難千百變乎前而我待之如一居之
如忘豈非約且近乎然天下之人方且淫于富
貴移于貧賤耽于安樂苦于艱難以失其素而
不能自拔宜乎其見道以為高且美不可及也
孟子聖人之亞其說道著明使人可親世蓋無

不讀讀而得于道者或鮮矣何也為富貴貧賤
安樂艱難所累而然也然富貴安樂順境也貧
賤艱難逆境也境順者易怠境逆者易勵怠則
失勵則得是人之常也吾獲罪下獄得吉村五
明河野子忠富未有隣三子相共讀書講道往
復益喜曰吾與諸君其境逆矣可以有勵而得
也遂抱孟子書講究礱磨欲以求其所謂道者
司獄福川氏亦來會稱善於是悠然而樂莞然

而笑不復知園牆之為苦也遂錄其所得號為
講孟劄記夫孟子之說固不待辯然喜之不足
乃誦之口誦之不足乃筆之紙亦情之所不能
已則劄記之作其可廢哉抑聞往年獄中無政
酗酒使氣喧呶紛爭絕無人道

今公即位庶政更張延及獄中百弊日改衆美
並興蓋司獄亦與有力焉今乃與諸君悠悠講
學以得樂其幽囚者寧可不思所以對揚乎哉

安政乙卯秋日二十一日藤寅書諸野山獄北
房第一舎

今安政乙卯秋二十一日藤寅書諸野山獄北
房第一舎

講義記卷之一

第一場 乙卯六月十三日

孟子序説

孟軻騶人也。遊事齊宣王梁惠王。

經書ヲ読ムノ第一義ハ聖賢ニ阿子ラヌコト要ナリ。若少
シニテモ阿ル所ノレハ。道明ナラス。學クニ益ナクシテ害
アリ。孔孟生國ヲ離レテ。他國ニ事ヘ給フコト。齊マヌリナ
リ。凡君ト父トハ其義一ナリ。我君ヲ惡ナリ。昏ナリトシテ。
生國ヲ去テ他ニ往キ。君ヲ求ルハ。我父ヲ頑惡トシテ家ヲ
出テ隣家ノ翁ヲ父トスルニ齊シ。孔孟此義ヲ失ヒタマフ

1. 如何ニモ辨スヘキ操ナレ。或曰孔孟ノ道大ナリ。兼テ天下ヲ善クセント欲ス。何ヲ自國ヲ必ストセシ。且明君賢主ヲ得。我道ヲ行フ時ハ。天下共ニ其澤ヲ蒙ルヘケレハ。我生國モ固ヨリ其外ニアラス。曰ク天下ヲ善クセント欲シテ我國ヲ去ルハ。國ヲ治メント欲シテ身ヲ修メサルト同シ。修身齊家治國平天下ハ。大學ノ序決シテ亂ルヘキニ非ス。若身家ヲ捨テ國天下ヲ治平ストモ管晏ノスル所ニシテ。説過シテ會ヲ獲ルト云者ナリ。世ノ君ニ事ルコト論スル者謂テク。功業立ザレハ國家ニ益ナシト。是大ニ誤也。道ヲ明ニシテ功ヲ計ラス。義ヲ正シテ利ヲ計ラズトコト

云ヘ。君ニ事テ遇ハサル時ハ。諫死スルモ可ナリ。幽囚スルモ可ナリ。饑餓スルモ可ナリ。是等ノ事ニ遇ヘハ。其身ハ功業モ名譽モ無キ如クナレト。人臣ノ道ヲ失ハス。永ク後世ノ模範トナリ。必其風ヲ觀感シテ。興起スル者アリ。遂ニハ其國風一定シテ。賢愚貴賤ナヘテ節義ヲ崇尚スル如クナルナリ。然レハ其身ニ於テ功業名譽ナキ如クナレト。千百歳ヘカケテ其忠タル。豈譽ヲ數クヘケレヤ。是ヲ大忠ト云ナリ。然レト此論コレ國體上ヨリ出來ル所ナリ。漢土ニ在テハ君道自ラ別ナリ。大抵聰明睿智優沈ノ上ニ傑出スル者其君長トナルヲ道トス。故ニ堯舜ハ其位ヲ他人ニ讓リ。

湯武ハ其主ヲ放伐スレバ聖人ニ害ナシトス。我邦ハ上
天朝ヨリ下列藩ニ至ルマテ。千萬世ニ襲レテ絶エサルコ
ト。中々漢土ナトノ比スベキニ非ス。故ニ漢土ノ臣ハ譬ハ
半卒渡リノ奴婢ノ如シ。其主ノ善惡ヲ擇テ轉移スルリ固
其所ナリ。我邦臣ハ譜代ノ臣ナレハ。主人ト死生休戚ヲ同
シレ。死ニ至ルト雖モ主ヲ棄去ルヘキノ道絶テナレ。嗚呼
我父母ハ何國ノ人ヲ。我衣食ハ何國ノ物ヲ。書ヲ読道ヲ知
ル亦誰カ恩ヲ。今ツク主ニ遇ハサルヲ以テ。忽然トシテ是
ヲ去ル。人心ニ於テ如何クヤ。我孔孟ヲ起レテ。與ニ此義ヲ
論セント欲ス。

開ク近世海外ノ諸蠻。各其賢智ヲ推舉シ。其政治ヲ革新シ。
駸々然トシテ。上國ヲ凌侮スルノ勢アリ。我何ヲ以テカ
是ヲ制セシ。他ナレ。前ニ論スル所ノ我國體ノ外國ト異ナ
ル所以ノ大義ヲ明ニシ。蘭國ノ人ハ蘭國ノ為ニ死シ。蘭藩
ノ人ハ蘭藩ノ為ニ死シ。臣ハ君ノ為ニ死シ。子ハ父ノ為ニ
死スルノ志確乎タラハ。何ヲ諸蠻ヲ畏ンヤ。願クハ諸君ト
茲ニ從事セシ。

第二場 六月十八日

梁惠王上 首章

王何必曰利。亦有仁義而已矣。

案スルニ魏ノ武侯二年安邑ニ築ク。其子惠王三十一年。秦
商君ヲ用ヒ。東ニ侵シ河水ニ至ル。安邑ハ秦ニ近キ故。徒テ
大梁ニ治ス。三十五年禮ヲ卑フレ幣ヲ厚フシ。以テ賢者ヲ
招ク。而テ孟子梁ニ至ル。魏ノ時事大暮スノ如シ。此時惠王
首トシテ國ヲ利スルヲ問フ。亦志アリト云ヘシ。而テ孟
子是ヲ挫ク者ハ何ゾヤ。蓋シ仁義ハ道理ノナスヘキ所ナ
リ。利ハ功效ノ期スヘキ所ナリ。道理ヲ主トスレハ功效ハ
期セシテ自ラ至ル。功效ヲ主トスレハ道理ヲ失フニ至
ル。少カラス。且功效ヲ主トスル者ハ。事皆苟且ニシテ成
遂スル所アルコト少シ。假令少ク成遂スル所アレバ永久

ヲ保スルニ足ラス。永久ノ良圖ヲ捨テ目前ノ近效ニ從フ。
其害言フニ堪ヘカラス。苟モ能ク一向ニ義理ノ當然ヲ求
メ。終始ナク作輟ナキ時ハ。又何ク事ノ成テサルヲ憂ヘン。
孟子惠王ノ利心ヲ挫クモ亦是カ為ナリ。是諸葛武侯ノ所
謂鞠躬盡力死而後已。至成敗利鈍則非臣之明所能逆觀也。
ノ義ナリ。是道學ノ根元。先賢ノ論スル所備レリ。今必シモ
贊セス。今且諸君ト獄中ニ在テ學ヲ講スルノ意ヲ論セシ。
俗情ヲ以テ論スル時ハ。今已ニ囚奴トナル。復ク人界ニ接
シ。天日ヲ拜スルノ望アルヲナシ。講學切劇シテ成就ス
ル所アリト雖。何ノ功效カタテント云ハ。是所謂利ノ説

ナリ。仁義ノ説ニ至テハ然ラス。人心ノ固有スル所事理ノ
當然ナル所。一トシテ為サル所ナシ。人ト生シテ人ノ道ヲ
知ラス。臣ト生レテ臣ノ道ヲ知ラス。子ト生レテ子ノ道ヲ
知ラス。士ト生レテ士ノ道ヲ知ラス。豈耻ツヘキノ至リナ
ラスヤ。若シ是ヲ耻ルノ心アラハ。書ヲ讀ミ道ヲ學フノ外
術アルコトナシ。已ニ其數箇ノ道ヲ知ルニ至ラハ。我心ニ於
テ豈悦ハレカラサランヤ。朝聞道夕死可矣ト云ハ是ナリ。
亦何フ更ニ功效ヲ論スルニ足ンヤ。諸君若茲ニ志アラハ。
初テ孟子ノ徒タルコト得ン。抑近世文教日ニ隆盛。士大夫
書ヲ挾ミ師ヲ求メ。兀兀孜孜タラサルハナシ。其風懿美ト

云フヘシ。吾輩獄中ノ賤囚。何ゾ喙ヲ其間ニ容ルコトヲ得ン
ヤ。然レモ今ノ士大夫。學ヲ勤ムル者。若其志ヲ論セバ。名ヲ
得シカ為ト。官ヲ得シカ為トニ過キス。然レハ功效ヲ主ト
スル者ニシテ。治ト義理ヲ主トスル者ト異ナリ。可不思哉。
嗚呼。世ニ讀書ノ人多クレテ。真ノ學者者幾多ク。初其志已ニ
誤レハナリ。精ヲ勵スノ主多クシテ。真ノ明主ナキ者ハ治
ヲ求ルノ初。其志已ニ誤レハナリ。真學者真明主出ルニ非
レハ。僅ニ順境ヲ語ルヘクシテ。未タ逆境ヲ語ルヘカラス。
吾輩逆境ノ人乃チ善ク逆境ヲ説クコトヲ得ルノミ。
癸丑甲寅墨魯ノ變。大體ヲ屈シテ。陋夷ノ小醜ニ從フニ至

ル者ハ何ゾヤ。朝野ノ論。戰ノ必勝ナク。轉シテ變故ヲ滋出
セシコトヲ恐ル、ニ過キス。是亦義理ヲ捨テ、功效ヲ論
スルノ弊。與ニ逆境ヲ語ルヘカラサル者ニ非スヤ。世道名
教ニ志アル者。再思セヨ。三思セヨ。

第二章

賢者而後樂此。不賢者雖有此不樂也。

此章ニ於テ樂ミト云フヲ發明スヘシ。文王ノ樂ハ臺池
鳥獸ヲ樂ムニ非ス。民ノ樂ムヲ樂ムナリ。民ノ樂モ亦臺池
鳥獸ヲ樂ムニ非ス。乃チ文王ノ樂ムヲ樂ムナリ。君民上下
互ニ其樂ヲ樂ム。コレヲ倍ニ樂ムト云。樂ノ樂ミハ之ニ及

ス。其樂ムト臺池鳥獸ニソリテ。民ト倍ニ之ス。故ニ獨樂ト
云。今人酒ヲ樂ム者アリ。色ヲ樂ム者アリ。奕ヲ樂ム者アリ。茶ヲ
樂ム者アリ。其他百千ノ樂ム所。技樂ニ暇ソラス。是皆衆ノ
徒ナリ。苟モ文王ノ樂ヲ樂ントナクハ。父子相樂ミ。君臣相
樂ミ。兄弟親族。朋友鄉黨。相樂ムノ境ヲ自得セハ。豈樂カラ
スヤ。然レバ今諸君ト微ニ繫カレ。此樂萬々望ナシ。但相共
ニ斯道ヲ研究シ。縲紲牢往何物タルヲ知ラサルニ至ラハ。
豈樂ノ樂ニ非スヤ。願クハ諸君ト倍ニ之ヲ樂マン。

第三章

穀與魚鼈不可勝食。材木不可勝用。七十者衣帛食肉。黎民

不飢不寒。

凡政ハ戸口ヲ増スヲ主トス。米穀魚鼈材木ハ乃チ戸口ニ奉スル所以ノ物ナリ。提封百里ト云ヒ。七十里ト云。同シト雖。戸口米穀魚鼈材木ニ至テハ。相倍蓰伍什スル者アリ。土地ハ廣メントスルモ得ヘカラス。故ニ土地上ニ生スル者ヲ殷盛ニスルト甚便トス。然ルニ昇平日久キ時ハ。戸口ハ自ラ増スト雖。米穀諸物却テ大ニ減耗シ。國力從テ困屈シ。其甚シキニ至テハ。遂ニ國中ノ人民衆多ナルヲ憂ヒ。是ヲ養フコト能ハサルニ至ル。豈一大怪異ノ事ニ非ヌヤ。帑ヲ空同ヲ食ヒ飢ヘス寒ヘス等ノ事ニ至テハ。亦自ラ當今ニ切實

ナル措置幾多モアルヘシ。其說甚長シ。今敢テ贅セス。

第三場 六月廿二日

第四章

民父母

民父母ノ教。蓋シ康誥ニ所謂。如保赤子ニ原ツク。大學ニモ是ヲ謂フ。孟子ニ至リ益々是ヲ謂フ。蓋シ父母ノ子ニ於ケル。已ニコレヲ愛養シ。又是ヲ教訓ス。是ニ於テ人ノ父母タルニ。負カス。苟クモ養テ教ヘス。教ヘテ養ハズ。父母ノ道ニ於テ何トカ謂ン。君道モ亦然リ。其要已ニ第三章。及第七章ニ説明スル如シ。下章仁政王政等ト云者。其義亦皆是ニ準

又論語ノ庶富教ト併セ觀ルヘシ。

第五章

施仁政於民。可使制挺以撻秦楚之堅甲利兵矣。勿疑。
魏ノ國タルヤ。西ハ秦ニ壓サレ。南ハ楚ニ逼ラレ。東ハ齊ニ
窺ハル。其自立ノ難キ。言ヲ待タス。魏ノ為ニ策スル者。宜レ
ク兵械ヲ修メ。糧餉ヲ儲ヘ。卒伍ヲ練リ。將領ヲ撰フ。ナド云
ヘシ。然ルニ孟子ハ則然ラス。唯仁政ト言ノモ。挺ヲ制シ。秦
楚ヲ撻ツト云ノモ。宜ナルカナ。當時孟子ノ説ヲ以テ事情
ニ測ナリトスルヲ。然レモ是ハ大ニ事情ニ切ナル者アリ。深
ク察セサルノモ。吾試ニ孟子ノ策ノ本末ヲ論セン。仁政ノ

孟子卷之六

民ニ施シ。刑罰ヲ省キ。稅斂ヲ薄フスル。是第一下手ノ處ニ
シテ。夫ヨリ封疆ノ諸城ヲ撤シ。兵ハ悉ク農ニ歸シ。天下ノ
ハ何ヲ以テ稅斂ヲ薄セン。政ノ民ニ便ナル者ハ。難易ヲ
論セス。必舉行シ。士ノ民ヲ治ムルニ堪ル者ハ。遠近親疎ヲ
論セス。必擢用シ。務テ民ト休息シ。民ヲシテ我ヲ信戴シテ
休サラレム。若一旦三國兵ヲ以テ來侵スルコトアラハ。大
ニ國中ニ令シテ云ク。我方ニ斯民ヲ愛育セント欲ス。如何
セン。隣國ノ逼迫トナリ。却テ斯民ヲ苦惱セシムルニ至ル。
哀ムニ堪ヘス。民等意ニ任セテ出降リ。其性命ヲ全スヘシ。
我已ニ此國ニ主タリ。一死社稷ノ為ニスルアルノモ。敢テ

寸歩ヲ退避セスト。果シテ斯ノ如シハ。四方志士。其威
慨シテ興起セサランヤ。誠ニ斯ノ如クナレハ。誰カ其國ヲ
奪フコト得ンヤ。况ヤ此時秦楚齊ノ諸國。國富ミ兵強ク將
帥ナリト雖。原ト氏ヲ安スルヲ以テ心トスル者アルコト
ナケレハ。數月ナラスシテ潰走スルコト必セリ。且燕齊ノ
事ヲ以テコレヲ證セン。燕王噲國ヲ其相子之ニ讓テ國大
ニ亂ル。齊ノ宣王コレヲ擊ツ。燕士卒戰ハズ。城門閉ヂス。五
旬ニシテ是ヲ棄ク。其後二年燕人太子平ヲ立テ王トシ。其
國ヲ復ス。コレヲ昭王トス。昭王既ニ位ニ即キ。身ヲ卑フシ
幣ヲ厚フシ賢者招ク。遂ニ秦楚三晋ト謀ヲ合セテ齊ヲ伐

チ之ヲ敗リ。七十餘城皆下ル。齊城ノ下ラサル者聊莒即墨
ノミ。餘ハ皆燕ニ屬ス。齊ノ湣王出走ス。田單乃チ即墨ヲ以
テ大ニ燕軍ヲ敗リ。七十餘城ヲ復シ。襄王ヲ莒ニ迎ヘテ齊
國舊ニ復ス。夫燕噲齊湣ハ皆愚ノ極ナル者ナリ。仁政ヲ民
ニ施スコト絶テ無シ。然レモ昭王襄王ニ至リ能ク國ヲ復
シ難ク報スルコトヲ得ル者ハ他ナシ。齊燕ヒナ巍然タル
大國ニシテ而モ祖先以來國ヲ有スルノ日久レ。民心ヲ得
ルコト深レ。故ニ一旦破潰スト雖。遂ニ滅絶スルコト能ハス。
况ヤ之ニ加フルニ仁政ヲ以テスル者武備ヲ設ケズト雖。
執力之ヲ取ルコトヲ得ンヤ。且兵畧ヲ以テ是ヲ論スルニ。屈

伸ノ利ニ通スルニ非レハ奇勝ヲ制スルコト能ハス。封疆
 フ守ルニ城砦ヲ以テシ。重兵ヲ置テ之ニ鎮スルハ徒ニ神
 フ知リテ屈ス。以テ伸トスルコトヲ知ラサルト云フヘレ
 敵兵ノ來ル封疆禦カズ。郊野戰ハサレハ敵初メヤ必ス疑
 テ敢テ進マズ。我靜ニシテ動カズコレヲ屈トス久レテ敵
 必悔テ進ム。我尚靜ニシテ動カズコレヲ屈トス。敵進テ戰
 フコト得ズ。退テ食ヲ得ル所ナレ。必四出慢掠ス。是ニ於テ
 我國ノ民心益々服セズ。敢テ敵ノ用トナランヤ。斯ノ如キ
 コト經年。韓白ノ將ト雖何ノ術ヲカ施サン潰ヘスレテ何
 ヲカ待シ。况ヤ闔國ノ義士民。期セスレテ來援スル者雲霞

ノ如キヲ疑ナシ。是ニ敢テ始テ大ニ一伸シ。永ク隣寇ヲ懲
 スルニ足ル。然ラスシハ封疆ノ攻守。郊野ノ戰爭。一勝一負
 何ヲ數ルニ足ンヤ。然レ庄此策は大決斷大堅忍ノ人ニ非
 レハ必達ルコト能ハス。若初メ少シクコレヲ行フニ意ノ
 リテ半途ニシテ又廢スル時ハ其害殆ント言ニ堪ユヘカ
 ラス。故ニ疑フ勿レテ以テ之ヲ終フ。勿疑ノ義。功利者流ノ
 知ル所ニ非ス。故ニ余梁王此策ヲ用ル能ハサルヲ惜マス。
 切ニ令人ノ用ヒサルヲ惜ム。併セテ他人ノ用シコトヲ望ム
 ナリ。其詳獄會問答ニ論ス。願クハ就テ見タマヘ。

第六章

孟子見梁襄王。卒然問曰天下惡乎定。

梁ノ襄王ノ暗愚固ヨリ論ヲ待タズ。但其尤暗愚ヲ見ルヘ
キ者果シテ何レニナリヤ。曰ク天下惡乎定ノ一句ニアリ。
此時梁國四方難多シ。已ニ前章ニ云カ如レ。然ルニ襄王一
モ憂勤惕厲ノ色アルコトナレ。其天下惡乎定ト云ハ世上
話ナリ。カ、ル田別者安シソ與ニ語ルニ足シ。蓋シ此章ヲ
舉テ孟子梁ヲ去ル所以ヲ示スナリ。抑有志ノ人言語自ラ
別ナリ。心身家國切實ノ事務ヲ以テ世上話トナス者。取ル
ニ足ル者有ルヲナレ。是人ヲ知ルノ真訣ナリ。然レ凡是ヲ
以テ人ヲ知ルノ訣トスルモ亦世上話ノ類ノミ。宜ク親切

及省スヘシ。辯ヲ修メ誠ヲ立ル是君子ノ學ナリ。

第四場 六月廿七日

第七章

無恒産而有恒心者惟士為能。此章明白雄偉。讀者自多其旨ヲ了シ。且興起スルヲ知ラ
サルハナシ。中間保民而王。仁術百姓之不見保為不用恩焉。
不為考與不能者之形。善推其所為。心為甚。及其本。焉有仁人
在位問民而可為也。則民之産等。義譽深々味テ自得スヘ
シ。今若シモ數々セズ。但吾徒心身上ニ於テ猛省スヘキコ
ト。國家政治上ニ於テ極論スヘキコトアリ。吾豈黙止ス

ハカシヤ何カカ政治上ニ於テ極論スヘキト云曰ク使天下仕者皆欲立於王之朝以下五條是夫也。是孟子政ヲ發シ信ヲ施スル效驗ヲ説クナリ。方今君公賢明相臣勤勵庶事舉テ出ル者ナシ。古ノ治國ト雖以テ尚フルヲテシ。而テ未タ五條ノ效驗ヲ見サル者。他ナシ。民ヲ惠ムノ美聲アリ。臣雖愚ニ及ブノ實惠ナシ。故ニ耕者商賈行旅ノ欲スル所未タ遂ニ至ラサレノ也。故ニ余常ニ民産ヲ制シ。饑寒孤獨ノ先ニシ。救貧恤病育幼ノ政ヲ興シ。庠序學校ノ教ヲ謹等ノ事ニ於テ。最總々タリ。是ヲ政ノ先務トシテ。更ニ極論スルキハ。仕者疾其若者ヲ欲スル所ナリ。方今當路ノ人ヲ

訓政考 卷之二

見ル。而大志規模狹隘ニシテ人ヲ欲ル。トノ量ナシ。故ニ才學伎能ノ士アリ。雖藩內ノ人ニ非レハ斷レテ延見セズ。況ヤ救テ草廬ヲ願ヒ。傲睨茲ヲ捫スルノ談ヲ聞レヤ。故ニ天下ノ仕者吾朝ニ立レト欲ル。人雖遠ニ其入ラシム。ラ欲シテ門戸ヲ閉ル。如キノミ。且艱難憂懼國トシテ。是ナキハナシ。或ハ國主德ヲ失ヒ。奸臣路ニ當ル如キ。是カ忠臣殺シタル者。且皮厥慨悲憤セサルハナシ。吾苟モ自ラ治メ餘リタル時。宜ク放湯ノ葛伯ニ若ル如ク。他國ノ非義無道。且諭シ且誡メ。奸臣害ヲナス如キハ。為ニ是ヲ誅除シ。務メテ其國忠臣義士ノ憂鬱ヲ伸シムヘシ。吾常ニ謂ラク

青島月刊

卷之二

宰相臣天下ヲ兼善スルヲ誠志。宇内ヲ包舉スルノ宏量アリテ。先懷ヲ開ク。天下ノ士ヲ拔下ニ招集シ。技藝アル者才能アル者。學識アル者。悉ク皆收羅セハ。三五年ヲ出スレテ。拔下ノ人才。天下比ナギニ至ラン。加之他國ノ非我無道ヲ論議シ。忠臣義士ノ憂鬱ヲ伸ヘシノハ。四方孰カ吾藩ヲ仰慕セザクシヤ。於是列藩ト心ヲ協ヘ。幕府ヲ尊崇シ。上ハ天朝ニ奉事シ。下ハ封疆ヲ守リ。内ハ萬民ヲ愛養シ。外ハ夷狄ヲ威服セシメ。其偉功盛烈。孰カコレニ如シヤ。堂々タル長防赫々タル祖業。上明君相アリ。下賢士才臣アリ。而テ此事為スヘカラス。止云者アラハ。吾則曰ク。非不能也。不為

也。一羽ヲ舉與。新ク見枝ヲ折ルノ類ナリト。然レ凡是事体重大。囚奴ノ云々スヘキニ非ス。請フ心身上ニ於テ猛者スヘキ者ヲ説シ。無恒産而有恒心者。惟士為能ト。此一句ニテ。士道ヲ悟ルヘシ。諺ニ云。武士ハ食ハ子ト。高揚枝ト亦此意ナリ。然レ凡是。武士ノ教ト云ニハ非ス。武士ノ有様ナリ。武士ト云者ハ。飢テモ寒テモ。吾持前ノ心懸テ。失ハヌ程ノ事ハ申マテモ。ナキコトニテ。教ト云ニハ足ラヌ也。特ニ本邦ニテハ。武義ヲ以テ本トシ。中世以來。武門武士ト唱ヘ。専ラ武道武長ヲ勵ムコトナレハ。是程ノ事ハ三歳ノ小兒モ辨ヘ知ルコトナルヘケレハ。今更教ト云ニ及ハヌコトナリ。

但シ吾徒原ト是士格ヲ汚スト雖。其士道ニ合セサルヲ以テ今黜辱セラレテ囚奴トナリ。復タ士林ニ齒スルコトヲ得サルニ至ル。然レハ世ノ真ノ武士ヨリ吾徒ヲ見ハ。復士道アルコトナシトセンモ當然ナリ。然レ凡汝ハ汝タリ我ハ我タリ。人コソ如何トモ謂ヘ。吾願クハ諸君ト志ヲ勵マシ。士道ヲ講究シ。恒心ヲ鍊磨シ。其武道武義ヲシテ武門武士ノ名ニ負クコト無ラシメハ。滅死スト雖万々遺憾アルコトナシ。豈愉快ノ甚シキニ非スヤ。是所謂心身上ニ於テ猛者スヘキ者ナリ。此事實ニ吾一心身上ニアルコトナレハ。人ノカク借ラス人ノ財ヲ費サズシテ自在ニ成シ得ヘ

キコトナリ。若得スト云者。是ラハ亦是非不能也。不為也。二羽ノ舉與薪ヲ見枝ヲ折ルノ類ナリ。知ラス諸君此説ヲ以テ是トセン歟。非トセン歟。

第五場 七月二日

梁惠王下篇 首章

今之樂由古之樂也。 臣請為王言樂。

或疑フ今之樂由古之樂也トイヘハ。孔子ノ樂則韶舞ト云ヒ。故鄭聲ト云。皆非力。且臣請為王言樂ト云テ。鼓樂ノ事ノミナラス。田獵ノ事ニモ及フハ何ツヤ。 答曰。今之樂由古之樂也ト云ハ。大區別ト云ナリ。大區別トハ。民ト樂ト同ス

ル。樂ヲ同フセサルトノ區別ナリ。故ニ民ト樂ヲ同スル
時ハ韶漢ニテモ鄭衛ニテモ皆可ナリ。樂ヲ同フセサル時ハ
韶漢ニテモ鄭衛ニテモ皆不可ナリト云意ニテ。此章ハ樂
ノ善惡ハ姑ク置テ。樂ヲ同フスルト同フセサルトノ善惡
ヲ區別スルナリ。若孟子ヲシテ細カニ樂ノ善惡ヲ論セシ
メハ。固亦孔子ノ論ノ如キノミ。然レモ其實ハ樂ハ樂ナリ。和
樂ヲ本トス。故ニ為王言樂ト云モ樂ノ本ヲ論スルナリ。鼓樂
ニモセヨ。田獵ニモセヨ。民心上ノスル所ヲ樂ムニテコソ
樂ノ本ナレ。乃チ上篇第二章ノ文王麋鹿魚鼈ノ如キ皆真
ノ樂ト云ヘシ。此意ヲ知テ此章ヲ読ム時ハ何ノ疑カアラ

シ。今是カ為ニ一ノ切當ナル譬喩ヲ得タリ。學問ノ術固ヨ
リ端緒多シ。訓詁ノ學アリ。詞章ノ學アリ。考據ノ學アリ。老
佛ノ學アリ。是ヲ皆曲學トス。樂ニ世俗ノ樂アルカ如シ。吾
黨ノ志トスル義理經濟ノ正學ト異ナリ。義理經濟ノ學ハ
譬ハ古ノ樂ノ如シ。故ニ樂ノ善惡ヲ論セハ。古樂ヲ貴テ俗
樂ヲ賤シメ。學ノ善惡ヲ論セハ。正學ヲ崇ンテ曲學ヲ排ス
ルハ固リナリ。然レモ今茲ニ一人アリ。真ニ志ヲ立テ已ヲ
益シ人ニ益セントノ心ナレモ。偶々正學ヲ知ラス。曲學ヲ
主トスル者アラハ。豈一概ニコレヲ非トスルコトヲ得ン
ヤ。又其學ヲ所正學ニ似タレモ。其志却テ名ノ為ニシ利ノ

為ニスル者ナラハ亦豈一概ニコレフ是トスルヲ得ンヤ。然レハ學ヲ言ハ志ヲ主トス。其曲ト正トニ至テハ第二義ニ落ルナリ。是孟子古樂俗樂ノ説ナリ。今ヤ文教興隆。正學世ニ明ナリ。士孔孟ノ言ニ非レハ口ニ稱セス。三尺ノ童子モ管晏ヲ言フコトヲ耻ツ。吾諸君ト此世ニ生レ。正學ニ従事スルコトヲ得ル實ニ大幸ト云ヘシ。然レ臣志ヲ立ルヲ真ナラサレハ。名ハ正學ナレ臣實ハ曲學ニモ劣ルヘシ。事舊リタレ臣。子トシテハ孝ニ死シ。臣トシテハ忠ニ死シ。仰テハ皇國ノ大恩ニ報シ。俯シテハ一身ノ職分ヲ盡サント。日夜ニ志ヲ勵マシテ學ヲ勤メハ。其正學タルニ負カスト。

云ヘシ。孟子嘗テ云ク。五穀モ熟セサレハ。美稗ニ如カスト。思ハサルヘケンヤ。抑志サヘ真ナレハ。曲學ニテモ一概ニ非トスヘカラストハ。雖世ニ志アリテ。曲學ニ陷ル者アラハ。吾手ヲ把テ。正學ノ途ニ進ント欲スルハ。固ナリ。是ヲ以テ。又孟子樂ヲ論スル言外ノ旨ヲ領スベシ。

第二章

殺其麋鹿者。如殺人罪。

此章亦氏ト同フスルヲ云。就中麋鹿ヲ殺ス者。人ヲ殺スノ罪ノ如シト云フ。仁人深ク痛ム所ナリ。禽獸ノ微ヲ以テ。萬物ノ靈タル人ヲ殺ス。類ヲ知ラサルノ甚シキ者ナリ。

聖人ノ心ハ親ヲ親シ民ヲ仁シ物ヲ愛ス。皆類ヲ以テ推ス
ナリ。假リニモ此序ヲ亂ルヘカラス。日用萬事ニ付ケテ熟
考スヘシ。其親ヲ愛敬セマシテ他人ヲ愛敬スル者ヲ。孝經
ニハ悌徳悌禮ト云。而ルニ世ニハ狗馬ヲ愛シテ賢オヲ棄
テ。生民ヲ利シテ戎狄ヲ養フ者アリ。是亦如何ツヤ。

第三章

此章大議論ナリ。畧其端緒ヲ論セシ。隣國ニ交ル原ト是諸
侯近隣諸國ト交ルノ道ヲ論ス。然レ凡夷狄蠻ノ事ヲ引
クヲ以テ。或ハ誤テ夷狄ヲ待ツノ道トシ。遂ニ夷狄ニ事ル
フ以テ仁智ノ事トセンコトヲ恐ル。是細論セズンハアルヘ

カラス。凡隣國ニ交ルニハ親睦ヲ以テ主トス。故ニカ徳義
三ツノ者我ニ優レル者ニ在テハ。固ヨリ奉事スヘシ。或ハ
カヲ恃テ強梁ナル者アリ共。成丈ハ寛假シテ敢テ鋒ヲ爭
ハサルヘシ。若又小國ノ如キハ愛護シテ其他國ノ侵陵ヲ
免レシムヘシ。凡夷狄ノ陵侮ヲ受ケ。生民ノ塗炭トナルハ。
多クハ國內相爭フニヨル。世道ニ志アル者。最意ヲ留ムヘ
キ事ナリ。本藩人或ハ謂テク。安藝ハ吾舊國。宜レク時ニ乘
シ奪ヒ復シ。遂ニ十州ノ舊業ヲ恢シ。天下ト衡ヲ爭フヘシ
ト。此論余カ深ク痛心スル所ナリ。凡七道ノ諸藩。孰カ
天子ノ命ヲ奉シ。幕府ノ令ニ従フ者ニアラスヤ。相共ニ心

フ協ヘカ合セ。天朝幕府ニ奉事スヘキハ固其職ナリ。若其力徳義上レ。天朝ニ遠シ。下諸邦ニ字アラハ。天下ノ柄求ノスシテ自ラ得ヘシ。是ニ於テ必ス己ムヲ得ス。ンハ。文王武王ノ勇ヲ奮ヒ無道ノ國ヲ誅セハ。執力敢テ是ヲ禦カン。然レ是是好ムヘキコトニ非ス。其他自ラ治ゾズシテ衡ヲ争ントスルハ。徒ニ自ラ弊シテ蒙ヲ啓クノシ。況ヤ方今外夷四面ヨリ我蒙際ヲ伺フ。此時ニ當テ六十州ノ人心ヲ一塊石トナシ。以テ彼小醜ヲ懲ラシ。海波ヲ清ノシ。コト尤願フ所ナリ。抑古ノ仁智ノ君。強暴ノ敵ヲ待フ志ヲ存スルコト甚タ久遠。敢テ一旦ノ利害ヲ較セス。一時ノ屈

伸ヲ論セス。遂ニ善ク大仇ヲ斃シ。大功ヲ建ル。實ニ欣慕ニ餘アリ。後世ノ人。智慮短淺。一旦敗衄スレハ。志氣頽ニ沮喪シ。復タ能ク為ストナシ。哀ヘキ哉。憂フベキ哉。

第六場 七月六日

第四章

樂以天下憂以天下。

樂以天下憂以天下。是聖學ノ骨子ナリ。凡聖學ノ主トスル所。修己治人ノ二途ニ過キス。故ニ志伊尹之所志。學顏淵之所學ト云。又立志以明道。希文為主本ト云。モ此義ニテ。顏淵程明道皆聖人トナランコトヲ學フ人ナリ。是修己ノ學

ナリ。伊尹范希文ハ皆天下ヲ以テ任トスル人ナリ。是治人
ノ學ナリ。凡人ト生レ書ヲ讀ミ道ヲ聞カサレハ詮方ナキ
トナレ也。苟モ已ニ書ヲ讀ミ道ヲ聞クヲ得ハ。此學ヲ勤メ
此志ヲ勵マザルヘケンヤ。今諸君ト幽囚ニ辱シメラレハ
ト雖。幸ニ孟子ノ書ヲ講スルヲ得。何ノ幸カ是ニ加ヘン。若
天下ヲ以テ任トセントナラハ如何。先一心ヲ正シ。人倫ノ
重キヲ思ヒ。皇國ノ尊キヲ思ヒ。夷狄ノ禍ヲ思ヒ。事ニ
就キ類ニ觸レ。相共ニ切磋講究シ。死ニ至ル迄他念ナク。
片言隻語モ是ヲ離ル。トナクンハ。縱令幽囚ニ死スト
雖。天下後世必吾志ヲ繼キ成ス者アラシ。是聖人ノ志ト學

トナリ。其他ノ榮辱窮達毀譽得喪ニ至テハ。命ノミ天ノ
吾ノ所願ニ非ルナリ。

第五章

前章ノ論雪宮ヨリ起ル。此章ノ論明堂ヨリ起ル。並ニ題小
ニシテ論大ナリ。孟子滿腹盡ク是王政。盡ク是天下ト憂樂
ヲ同ナス。故ニ何事ニ觸レテモ必發露スルト斯ノ如シ。抑
今人孟子ノ大論ヲ聞ケ共。毫毛モ心ニ徹スル所ナキハ何
事ゾヤ。世務ノ事ハ先輩室鳩巢是ヲ論スルト詳ナリ。就テ
見ルヘシ。艱蹇孤獨ノ事余カ繼々タル所ナリ。曾テ西洋人
ノ清國ノ事ヲ記スルヲ見ルニ云ヘル事アリ。支那國內ニ

ハ人民皆街スルコト極テ盛ナリトイヘ共貧困ノ徒最夥
シ其窮迫甚キハ怒然トシテ視ルニ忍ビサル者アリ冬月
酷寒ノ時ニ至テハ夜間貧民相聚リ互ニ重索シ或ハ終夜
篝火ヲ燒テ其泣死ヲ防ク惟其病夫老婦ハ時トシテ凍死
ス王人其屍ヲ取リテ橋下堤側中ニ投入ス然レモ官吏之
ヲ詰問セス又曰支那ニテハ乞食ノ殺害シテ棄ルコト頗
ル多シ又病者殘廢者ノ如キハ道路ニ立テ餓ヲ往還ノ人
ニ乞テ又曰ク貧者路傍ヲ徘徊シテ食ヲ他人ニ乞フ時ハ
或ハ腹痛堪フベカラサル景状ヲナシ或ハ手足殘廢シテ
歩行屈伸ヲナスベカラサル状ヲナシ其最モ憐ナル者ハ

故テ士共女人眼目ヲ損シ其母自テ之ヲ携ヘ哀慙ノ情ヲ
切ニシテ多錢ヲ乞フ者アリ又ハ其愛子ヲ宮中ニ賣ンカ
為ニ男根ヲ剪リ棄テ之ヲ閹官トナシテ其身ノ榮ヲ謀ル
者アリ此惡風ヲ起シハ州内ニ病院ノ設ケナキカ故ナリ
又州内ニ幼院ナキヲ以テ貧者其子ヲ養育スルヲ能ハス
其憐子ヲ道路ニ棄ル者アリ北京府清國ノ都ノ如キハ一年捨
ル所ノ兒數ヲ記載スル時ハ大約九千人ニ下ラスト云ル
シハ漢土聖人ノ典籍具ニ存スト雖王政已ニ地ヲ掃ス遂
ニ西洋夷輩ノ非議ヲ招クニ至ル亦悲ムベキノミ
本朝ノ古訓病ヲ養フニ施藥院アリ醫ヲ掩フニ慈田院ア

唐ノ制京城ニ悲田病坊アリ。宋代ニ安濟坊養濟院編澤園ノ名アリ。明ニ義塚ノ号アリ。皆窮民ノ無告ヲ恤ム所以ナリ。舉テコレヲ今時ニ用ントナラハ豈其策ナカランヤ。

第六章

友ノ託ヲ受ケナカラ。其妻子ヲ凍餒セシムルハ人情ヲ忘ル。ナリ。士師士ヲ治ル能ハサルハ職分ヲ棄ルナリ。而テ國君天ノ託ヲ受ケ萬民ヲ養フ。而ルニ却テ是ヲ凍餒セシム。豈徒ニ友人ノ妻子ヲ凍餒スルノミナランヤ。天ノ命ヲ奉シテ万民ヲ治ム。而ルニ却テ是ヲ擾亂セシム。豈徒ニ士師ノ士ヲ治ル能ハサルノミナランヤ。誠ニ人情ヲ思ヒ職

分ヲ思ヒ。内ニ自ラ省スルヲラハ。固ヨリ面低レテ言ナカ
ルヘシ。今王ハ則左右ヲ顧ミテ他ヲ言フ。帝千歲ノ後ニ生
レ。書ヲ讀茲ニ至リ直ニ唾罵セント欲ス。但宜王ノ骨朽ル
テ已ニ久シ。論スル所益ナレ。吾徒事ニ臨ム毎ニ且ハ職分
ヲ思ヒ。且ハ人情ヲ思フ時ハ。過舉ナキニ庶幾カラシ敷。

第七場 七月十七日

第七章

此章賢ヲ進ムルノ道ヲ論スル。甚盡セリ。凡古ハ黜陟賞
罰皆衆論ノ公ヲ取ル。後世ハ則然ラス。故ニ往々請託賄賂
ノ私アルニ至ル。明君賢相苟モ是ニ察スル。テアリテ。庶幾

ノサニ臣ヲ命スル如ク。朝堂ニ大會シテ之ヲ議セハ。公議
因テ伸シコトヲ得ン。但シ舍テ道邊ニ作ル三年成ラスト
云ハハ己ニ適ク來議ヲ開ク上ハ。自ラ察シ其賢ト不可ト
ス見ル丁最モ要トス。抑周代ハ世祿ノ制ナレ。臣戰國ニ降
リ己ニ類壞シ。齊國ノ大ニテモ世臣ナキニ至ル。本朝世祿
ノ制其優厚周制ノ比スヘキニ非ス。然レハ我朝ノ今日ニ
生レ。祿ヲ世々スル者ハ。大小上下ニ限ラス。皆世臣ナリ。然
レ臣世臣ト云モ徒ニ祿ヲ世々スルヲ云ヒ非ス。註ニ云如
ク。與國同休戚者ナレハ。凡今日ニ生レ世祿ノ澤ニ浴スル
者ハ。一身ノ憂樂ヲ捨テ。國家ノ休戚ヲ以テ吾休戚トナス

ヘキヲ論ヲ待タス。苟モ此志ナキ者ハ人ニ非ルナリ。

第八章

湯武放伐ノ事ハ前賢ノ論具ハレリ。然レ臣試ニ見ル所ヲ
陳セシ。凡漢土ノ流ハ皇天下民ヲ降シテ。是カ君師ナケレ
ハ治ラス故ニ。必ス億兆ノ中ニ擇テ是ヲ命ス。堯舜禹武ノ
如キ其人ナリ。故ニ其人職ニ稱ハス。億兆ヲ治ムル丁能ハ
レハ。天亦必是ヲ廢ス。桀紂幽厲ノ如キ其人ナリ。故ニ天
ノ命スル所ヲ以テ天ノ廢スル所ヲ討ツ。何ソ放伐ニ疑ハ
レヤ。本邦ハ則チ然ラス。天日ノ嗣永ク天壤ト無窮ナ
ル者ニテ。コノ大八洲ハ。天日ノ開キタマヘル所ニシ

テ。日嗣ノ永ク守リタマヘル者ナリ。故ニ億兆ノ人宜ク日嗣ト休戚ヲ同フレテ復タ他念アルヘカラス。若夫征夷大將軍ノ類ハ。天朝ノ命スル所ニシテ其職ニ称フ者ノミ是ニ居ルコトヲ得。故ニ征夷ヲシテ足利氏ノ曠職ノ如クナラシメハ。直ニ是ヲ廢スルモ可ナリ。足利氏ノ君師ノ義ト甚相類ス。然レ庄湯武ノ如キハ。義ニ依リ職ヲ討ス。命ヲ天ニ承クト称ス。本邦ニ在テハ然ラス。赫々タル天朝天日ノ嗣宇内ニ照臨マシマスニ。天朝ノ命ヲ奉セシメテ。擅ニ征夷ノ曠職ヲ問ントナラハ。所謂以燕伐燕者ナリ。所謂春秋無義戰者ナリ。天子ノ命ヲ奉セシメテ。故國相征スルハ。何

程ノ正義ニ依ル。故ニ此章ヲ読ム者。審ニ辨テ致サドレ云ル義戰ニアラス。故ニ此章ヲ読ム者。審ニ辨テ致サドレ

第九章

此章ニ諭。前命ノ如クナレハ。國家ヲ視ルト巨室ニ如カサルナリ。後命ノ如クナレハ。國家ヲ視ルト璞玉ニ如カサルナリ。輕重ヲ失ヒ本末ヲ忘ルル。亦甚シト云ヘシ。其故何ヲヤ。從我ノ二字ニ遵ヤス。從我ノ心ハ何ヨリ起ルト尋ルニ。私欲ノミ。故ニ私欲ノ念能ク入ラシテ國家ヲ視ルト巨室璞玉ニモ及ハサシム。類ヲ以テ是ヲ推セハ人間今日ノ事。斯ノ如キ者甚衆シ。畏ルヘキカナ慎ムヘキカナ。

第十章

古語ニモ戰勝ハ易ク。勝ヲ守ルハ難シト云如ク。然ラ取ル
人難キニ非ス。然ラ守ルノ難キナリ。但民心ヲ得ル者ハ善
ク守ルヲ得ルナリ。然ラスレハ亦運而已矣。然レハ大業ヲ
興サントナラハ。征伐ノ日ニ在ラスシテ。昇平無事ノ日ニ
アリ。昇平無事ノ政。真ニ民心ヲ得ルニ足ラハ。其餘亦何ヲ
多言セシ。世ノ輕銳浮薄ノ徒。此義ヲ思ハスシテ。徒ニ遠畧
ニ志スハ。吾カ甚懼ル、所ナリ。

第十一章

未聞以千里畏入者也。一語胸ヲ刺スカ如シ。

皇國東

蝦夷ニ起リ。西琉球ニ至ル。亦小トスヘカラス。魯西亞米利
堅大ト雖亦何ノ畏ル、ニ足シ。況ヤ啖咭喇拂郎察ノ小
フヤ。若高恐ル、所アラハ。内政教ヲ修メ。外強暴ヲ平クル
一。殷湯ノ如クシハ。天下誰カ敢テ吾ヲ忤視センヤ。今ハ則
チ然ラス。喘々焉トシテ奉承ノ至ラサランコトヲ恐ル。孟子
ヲシテ我。今日ヲ目セシメハ。其レ何トカ謂シ。在上ノ君子
君子哉。此章ニ至ラハ亦何ノ面目カアル。

第八場 七月十九日

第十三章

関ハ開濟也ト註セリ。蓋シ鄒魯ノ兩軍相逼リ。未ク兵及相

接フルニ至ラス。鯨波嘯ト起リタルニテ。鄒軍一散ニ潰走
シ。將吏三十三人。潰兵ノ跡ニ残りテ。斃殺サル、也。固ヨリ
力戰シテ死スルニ非ス。若レ兵家ヲレテ是ヲ議セシメハ
必ス云ン。操練熟セス。節制整ハスレテ是ニ至ルト。是本ヲ
知ラサルノ論ナリ。故ニ孟子曰。君行仁政。斯民親其上。死其
長矣。蓋シ民心。上ヲ親ム故ニ。上ノ令ニ從フヨト。譬ノ指ヲ
使フカ如レ。長ニ死スル故ニ。水火ノ中ヲ避ケス。果シテ然
ラハ我兵一塊石ノ如シ。此一塊石ノ兵ヲ以テ敵ニ當ル。克
クザル所ノレ。所謂操練節制論也。スレテ固ヨリ其中ニ存
ス。孟子ノ言。豈虚ナランヤ。

又案スルニ古來名將ノ勝ツ所以ヲ觀ルニ。大抵將吏身士
卒ニ先ンシ。堅陣強敵ヘ慕然ト驅入ル。士卒等大將ヲ討セ
テハト皆我先に衝蒐ル。是ニ因テ勢聲猛烈ニシテ。齊一向
テ所敵ナル。是ヲ以テ上ヲ親ミ。長ニ死スルノ兵ニ非レハ
用ベカラス。後世是ヲ知ラスレテ。勝ク器械節制ノ末ニ求
ム。我其何ノ意ナルヲ知ラス。

第十三章

此章ノ義熱味ヌヘシ。小國ヲ以テ兩大國ノ間ニ挟マル、
是大難事ナリ。楚ニ事レハ齊怒リ。齊ニ事レハ楚怒ル。利シ
キ所ナシ。是文公ノ問ナリ。孟子對テ是謀非存所能及也ト。

是後ヲニ推諉ノ言ヲ為スニ非ス。此事ハ實ニ文公ノ決心ヨリ出ルニ非レハ。他人ノ智慧ヲ借テ行フ様ノ事ニテ違クヘキニ非ス。然レモ聞シト欲スルノ心親切ニシテ無已ニ至テハ。亦以テ一説ヲ發スヘシ。鑿斯池也。築斯城也。トハ茫然手ヲ拱シテ備ヘサルニ非ス。防禦ノ手段ヲ盡シテ不意ノ伺フヘキナカラシムルナリ。與民守之トハ。上下一致シ君臣相親ミテ高城深池ヲ守ルナリ。效死而民弗去トハ。萬一事敗レ城池モ人ニ奪ル。ニ至テハ。君民上下城ヲ枕ニシテ切腹ト覺悟ヲ究ルコトナリ。果シテ如此ナレハ。是可為也。トテ齊ニ事ルコトモ為スヘシ。楚ニ事ルコトモ為

スヘシ。齊楚共ニ事ヘサルコトモ為スヘシ。是ニ於テ事ルモ事ヘサルモ。其權我カ掌握ニアルナリ。兵家ニ籠城ノ大將心定テ説テ籠城致上ハ。負ハ必ス切腹ト思ヒ可定ト云モ亦此義ナリ。

是謀非吾所能及也。ニ於テモ亦感アリ。癸丑亞美理駕使舶ノ來ル。國書ヲ幕府ニ呈ス。幕府乃チ適ク諸藩ニ示シ。和戰ノ得失ヲ問フ。時ニ劍客齋藤彌九郎曰ク。幕府ノ和議已ニ決ス。凡和戰ノ決ハ大將軍ノ方寸ニアルヘシ。幕府真ニ戰ント欲セハ。必ス大號ヲ降シテ云シ。亞美理駕ノ無禮斯ノ如シ。吾レ旗下ノ衆ヲ提ケ。以テ其罪ヲ討セントス。

天下志ヲ同フスル者ハ来テカフ戮スヘシト果シテ然ラ
 ハ和戰ノ二字一朝ニシテ決スヘシ何ソ小田原評談ヲ以
 テセシ今ハ則チ然ラス幕府和議已ニ決ス尚天下是ヲ
 非スル者アラントテ恐ル徐ニ夷書ヲ頒示シテ其意ヲ料
 ルノミト已ニシテ甲寅ノ春夷船再ヒ来ル和議果シテ成
 ル余彌九郎カ卓識ニ服ス古語ニモ我志先ツ定リテ詢謀
 スルニ皆同シ鬼神其レ倚リ龜筮協ヒ祐クト然レハ志ノ
 先定ルト定ラヌト自ラ断スルニ在ルノミ孟子非吾所及
 也ノ意蓋シ斯ノ如シ

第十四章

齊人將築薛

城ニ二様アリ城ヲ築テ人ヲ衛ル一ナリ國々ノ本城ハ大
 抵然リ城ヲ築テ地ヲ守ルニナリ境目城ノ類是ナリ薛ハ
 滕ト甚近シ而テ臨菑^齊ノヨリハ稍遠シ故ニ薛ヲ取ルト
 雖城ヲ築キ戍兵ヲ置カサレハ其地ヲ守ル^一能ハス故ニ
 齊人薛ニ築クハ境目城ノ類ニシテ已ニ其地ヲ守リ足溜
 フ拵ヘ漸々ニ滕ニ逼ントスルナリ滕人豈恐サル^一ヲ得
 シヤ抑下田箱館ノ地滕ノ薛ニ於ケルト如何ソヤ吾甚疑
 業^一ツ劍ノ紛ヲ垂ルニハ繼ヘキ^一ヲ為スト云フ^一最
 モ心ヲ付クヘシ當今藩國ヲ以テ云フニ

天朝ヲ

尊也。幕府ヲ敬也。祖法ニ則リ。多士ヲ養也。萬民ヲ愛シ。賢才ヲ招キ。武備ヲ修ムルノ類皆繼クヘキノ事ナリ。

君如彼何哉

此言亦深思スヘシ。兎角敵國ノ事ハ我心ニ任セヌ事ナレハ。我ハ我カ疆ムヘキノ所ヲ疆ムルコト肝要ナリ。然ルニ敵ヲ弱カレト思ヒ夜ヘカシト思フハ皆愚痴ノ甚キナリ。吾盛ナレハ何ヲ敵ノ盛ヲ恐レン。我強ナレハ何ノ敵ノ強ヲ畏レン。吾盛強ヲ勉メズシテ人ノ衰弱ヲ願フ。是今人ノ見也悲カナ。

第十五章

此章兩説ヲ設クト云ル。主意效死勿去ノ上ニアリ。第十三章ト同シ。但シ大王ノ一説人多ク了解セス。蓋シ狄人ノ初テ來侵スヤ。大王ノ胸中已ニ定算アリ。謂ラク狄人ノ勢正ニ威強ナリ。宜シク驕セテ後是ヲ制スヘシ。故ニ皮幣大馬珠玉ヲ以テ事ル。至ラサル所ナシ。遂ニ土地ヲ棄テ是ニ興フルニ至ル。狄人ノ心益々驕ル。而テ我民ノ心ハ愈我仁心ニ服ス。是ヲ以テ去テ岐ニ柱キ邑ヲナシ。終ニ周家大業ノ基ヲ開クコトヲ得ルナリ。是皆大王ノ定算ニシテ。彼ヲ審ニシ己ヲ審ニシ。宏量偉度ノ人ニ非レハ及フベキノ非ス。

豈滕文輩ノ能ク興リ知ル所ナランヤ。然レ此大志ナク
ンハ。區々ノ小成敗ニ頓着シテ。遂ニ自ラ喪亡セシノミ。

第十六章

吾之不過魯侯天也。

此一語是孟子自ラ決心シテ天ニ誓フ所ナリ。故ニ時ニ遇
ノモ遇ハヌモ皆天ニ任セテ顧ミス。我ニ在テハ道ヲ明ニ
シ義ヲ正フシ言フヘキヲ言ヒ為スヘキヲ為スノミ。是ヲ
以テ孔孟終身世ニ遇ハズレテ。道路ニ老死スレバ。是力為
ニ少レモ愧ルコトナク倦ムコトナシ。今吾輩ノ幽囚ニ陥リテ
孟子ヲ読ム。宜シク深ク此義ヲ知ルヘシ。

梁惠王通篇仁政ヲ説ク。末第十三章第十四章第十五
章ニ至テハ。皆己ノ疆ムヘキ分ヲ盡シ。成敗ハ天ニ任
スルヲ云。末章ニ至テハ。孟子自ラ遇不遇ハ天ニ任セ
テ斯道ヲ明ニスルノ本志ヲ云。並ニ皆首章仁義ヲ先
ニシテ利ヲ後ニスルノ論ニ照應スルナリ。

1784
2 1/2
1784

九
本
九

詩
五
卷
之
一

[Faint, illegible text within a rectangular border]

三

